2016/4/14

キリスト教学専修

＊第二演習・２０１６年度前期＊＊＊＊＊＊＊＊

A．予定　（同学年は五十音順）

第三演習室：

木曜日隔週・２コマ　→　１コマ１人　（＋火 or 金曜日５時限目？　後期から？）

６０分の発表＋３０分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

	担当者１	担当者２
5 月 12 日		
6 月 2 日		
6 月 23 日		
6 月 30 日		
7 月 7 日		
7 月 28 日		
予備		
予備		
予備		

B．関連するプログラム

１．研究室紀要の刊行：３月刊行

・第二演習での発表　→　論文、書評、サーベイ

・特別研究発表会：年２回、８月３１日（水）＋９月１日（木）と２０１７年３月

・学会発表の予行＋書評・サーベイ

・原則的には：大学院生全員が参加（博士後期課程だけでなく）

C．その他

・飲み物の準備：担当M

数種類の飲み物を準備する（種類はMで相談）。紙コップあるいはマイ・コップ。

・夏期の研究発表会の９月１日（木）は、食事会。

＊研究の基礎としての書評・サーベイ　＊＊＊

研究の条件：テキスト（書かれたものとはかぎらず）の厳密な読解

問題を的確に立てること（先行研究の分析・整理）

先行研究の全体動向＋直接参照すべき研究の徹底的な検討

論証すべきテーゼの明確化とその説得的な論証

↓

すぐれた研究をモデルにすること。書評の意義＝訓練としての書評。

・「研究サーベイ論文」をまとめること　→　後期D
　実例：　矢内原忠雄研究についての研究サーベイ論文
　岡﨑滋樹「矢内原忠雄研究の系譜――戦後日本における言説」(『社会システム研究』第 24 号、2012 年、223-262 頁。http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/ssrc/result/memoirs/kiyou24/24-11.pdf)

＊書評に向けて　＊＊＊

T．ピーターズ、R．J．ラッセル、M．ヴェルカー編
『死者の復活　神学的・科学的論考集』日本キリスト教団出版局、2016年。
　Ted Peters、Robert John Russell、Michael Welker（eds.），
　Resurrection. Theological and Scientific Assessments,
　Eerdmans, 2002.

＜目次＞
序論：　来るはずのもの　（テッド・ピーターズ）

第一部　復活と終末論的信頼性
１　体の復活、終末論、ならびに科学的宇宙論：キリスト教神学と科学の相互作用
　（ロバート・ジョン・ラッセル）
２　神学的現実主義と終末論的象徴体系　（ミヒャエル・ヴェルカー）
３　終末論の信頼性：創発的で目的論的なプロセス　（ジョン・ポーキングホーン）
４　進化から終末論へ　（ジェフリー・Ｐ．シュロス）

第二部　体の復活と人格の同一性
１　聖書と復活　（フランク・クリューゼマン）
２　霊的な体についてのパウロの概念　（ペーター・ランペ）
３　ルカにおける体の復活　（ハンス＝ヨアヒム・エックシュタイン）
４　古代エジプトにおける復活　（ヤン・アスマン）
５　虫けらにとっての希望：初期キリスト教の希望　（ブライアン・Ｅ．デイリー）
６　終末論と復活に関するシュライアマッハーの見解　（ベルント・オーバードルファー）

第三部　復活と自然法
１　神が記憶を与える：神経科学と復活　（デトレフ・Ｂ．リンケ）
２　サイバネティックス的不死　対　キリスト教的復活　（ノリーン・ヘルツフェルド）
３　復活の体と人格の同一性：終末論的知識の可能性と限界　（ナンシー・マーフィー）
４　キリストの姿に変換されて：同一性、人格、そして復活　（アンドレアス・シューレ）

第四部　復活、新しい創造、そしてキリスト教的希望
１　時間の流れの中の記憶と復活の概念　（デイルク・エヴァース）

２　新しい生命への復活：　終末論的変転の聖霊論的含意　（ギュンター・トーマス）
３　復活、有限性、そして生態学　（エルンスト・M．コンラデイ）
４　復活：概念的挑戦　（テッド・ピーターズ）

寄稿者

訳者あとがき　（小河陽）

＜書評・案＞

復活は、キリスト教信仰にとって核心的な事柄に属している。しかし同時に、復活は多くの現代人にとってまさに躓きの石とでも言うべき問題であろう。近代以降、神学においても、この躓きの石を取り除くさまざまな努力（本書では客観主義と主観主義に分類される）がなされてきたが、近年、復活をめぐる問題状況は新たな段階にさしかかりつつある。この問題状況を代表する論文集が邦訳され、日本の読者も復活をめぐる新しい思想動向に触れることが可能になった。それは、二〇〇一年にハイデルベルクで開かれた国際フォーラムの成果出版であり、そこには著名な科学者や神学者が、多く名前を連ねている。

・・・

この多様な資料によって問われる中心的問題として挙げられるべきは、「復活」に関わる「同一性」である。すなわち、キリスト教的復活理解の基本である「体」の復活について言えば、まず問われねばならないのは、キリストの「復活前の体」と「復活後の体」との同一性をめぐる問題であり、それは「体」をめぐる現代科学（生物学）の議論とも関連しつつ、「連続性と非連続性」の問題として定式化される。本論集では、この「連続性と非連続性」という定式はさまざまな文脈で繰り返され、たとえば、われわれ人間の終末における復活の場合には、現在の体と復活の際の体の「連続性と非連続性」となる。「霊の体」（パウロ）が何を意味するかは、この点と関わっており、本論集では、「古いものからの再創造」（「無からの創造」とは異なり、また自然的なプロセスにおいて可能となるものではない。それは神の恩恵・贈与である）の議論へと展開される（ラッセル、デイリーら）。

この「体」における復活の対極にあるのが、現代科学において構想される「サイバネティックス的不死」（人の脳のパターンを機械に移すこと）であり、それは人間の人格的同一性の問い直しを要求する。これに対して、マーフィーは非還元的物理主義の立場から、復活の前後で問われる人格の同一性（連続性）には、「われわれの道徳的性格」が不可欠であると主張する。実際、現時点において、サイバネティクス的不死は「空想科学小説」（ヘルツフェルト）の域を出ない。

では、世界の終末（科学的宇宙論は宇宙の未来像を「熱的死」として描く）や人間の死を超えた、復活前後の「同一性」は、最終的にどこにその根拠を求めうるのだろうか。本論考で示唆されているのは、「神の誠実さ」、「神の記憶」という論点である。「神の記憶」については、どこまで理性的探究が可能か、「最後の審判」とどう関係するのかなど議論は尽きない。しかし本論集を通して、神学と科学とが復活をめぐり創造的対話に招かれていることを確認することは、現代のキリスト者にとってきわめて意味深いものと言えよう。

＜ポイントの抜粋＞

ピーターズ

「二つの基本的方策」「ラッセル」

「客観主義者」「イエスのイースターの復活」「これを一つの例外と呼んだ」、「神が全ての死者たちを甦らせる時に新しい自然法則となるはずのものの最初の事例」

「主観主義者」「イースターでのどんな奇跡的介入も除外する」(7)、「イエスの信従者たちの霊に実存的に起こる事柄に適用させる」「キリスト教信仰は現代科学の挑戦に対して免疫を持っている」(8)

「「科学なしの」区域は存在しない」、「本書の問いは、こういう問いである。われわれは、復活を科学的および神学的にどのように評価すべきであるか？」

「対話させること」「創造的相互交流」(11)

「われわれはかつてアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドが哲学的「掻き集め」と呼んだ研究段階にある。この段階では、われわれは関連する資料と推測するものを集めてはいるが、まだ仮説を立てたり、体系を確立する用意ができるまでには全く至っていない」(12)

「両者は、私が「仮説的調和」と呼ぶプロセスで彼らが現実について学ぶことによる新しい方向づけに開かれた、真理を探究する共同体によって推進されているのである。」(13)

「ラッセルにとって、イエスのイースターの復活は新しい自然法則の最初の具体的例示である。復活は、自然法則に反する奇跡というよりも、自然法則を変える、神によって起こされた出来事である。未来には、われわれ全ては甦るであろう、自然に。」(13)

「ポーキングホーン」「神は人間の魂を構成する情報パターンを神的記憶の中に刻み込むであろう。そして終末には、神は変換された物質的創造物の中に人間の個性回復させるであろう。」(14)

「サイバネティックス的不死は、人間の技術的業績の結果として生じる科学化された終末論を構築する。」(15)

「人格的同一性の問い」、「連続性と不連続性の間の逆説的弁証」(16)

「マーフィーは非還元的物理主義の代弁者である」、「人間の自我は体化された自我である。したがって、復活における自己同一性はわれわれの体との連続性を、地上の生活を生きる間のわれわれ個々人の生活史との連続性を、維持しなければならない。」

「連続性を決定的に維持するものはわれわれの道徳的性格である」(17)

「科学と神学の間の対話は、この終末論的約束の内容に関して、批判的に査定し、理解できるようにする試みである。」(18)

ラッセル

「イエスの復活は」「これまで、今日の自然科学が投げかける挑戦に照らして、注意深く理論されたことはめったになかった。」(23)

「体の復活は最高順位のテストケースの意味を持つ」(24)

「ビッグバン」「その可視的宇宙のはるかな未来に対しては二つのシナリオがある。凍結(freeze)か燃結(fry)か、の二つである」(26)

「われわれはわれわれの中心的疑問に戻ることがｄけいるのである。キリスト教終末論はこれらの科学的シナリオと相反しないと見なすことができるのか？」

体の復活は、宇宙論的と生物学的と心理学的・哲学的の全体に関わる。
「ポーキングホーン」「空っぽの墓」「再-創造」
「最初の創造は ex nihilo［無から］であったが、それに対して、新しい創造は ex vetere［古きものから］であり・・・新しい創造は古い創造の神的贖いである。」（37）

ヴェルカー
「聖書の終末論的象徴体系の幾つかを精査する」（60）
「この世界と来たるべき世界との間の連続性と非連続性」（61）
「イースター以前とイースター以後のイエス・キリストの間の同一性と連続性」（64）
「連続性を示すために、聖書の伝承は「体」という言葉を使う」（65）
「この世における生と「来たるべき世」における生との間の連続性と不連続性」、「「変換」を指示しているのではない」（67）

ポーキングホーン
「soma［体］という語が繰り返されるのは連続性を表現しているのであり」、「翻訳不可能な形容詞 psychikon［魂的］と pneumatikon［霊的］の分離は不連続性を表現しているのである」（82）
「魂の意味」
「何が人間の同一性を維持させ得るかという問いとが、観察される体としての連続性の観点から議論できるような状況を越え出る状況下において、本書の寄稿者の関心である」、「神学的人間学」（83）
「本当の私」
「魂」「ダイナミックで、情報を担った「型」」（83）
「私であるパターン」（84）
「人間の連続する同一性の担い手」「復活の再体化」（85）
「来たるべき世界の命を無限に続く霊的前進と探究だとする観念は教父たちの幾人かに、とりわけニュッサのグレゴリオスに見出すことができる。」（87）

クリューゼマン
「ルカ文書」「パウロ」

ランペ
「組織神学はしっかりとした聖書釈義の基礎の上に築かれる。神学がいつでも科学とかみ合うことができるためには、神学は聖書が語っていること知る必要がある」（149）
「全体論的人間学」（150）

デイリー
「キリスト者が希望する不朽と神との永遠の交わりは自然の要求としてではなく、神の贈り物として理解されるべきである」（198）
「人格としての人間は、事実、その内部での神の積極的な掛かり合いを離れては「全体的」

ではないという確信」、「自然な権利というよりも神の贈り物である、という確信」（201）

ヘルツフェルト
「人間の心を新しい物理的な場所に移すこのような選択肢は、サイバネティックス的不死という標題のもとに一緒にまとめられるようになっている」（263）
「人の脳のパターンを機械に移すこと」（264）
「思想、記憶、感情、そして行動が人間の人格を定義するという仮定」「これらは意識の産物であり、その意識は頭脳の複雑さの現われ出る特性である」「人間とは基本的に生物学的機械」、「人間と機械は近い将来に合体するであろうと予言すること」（265）
「クレヴィエ」「人の脳をアップロードすることを体の復活と見なしている」（267）

マーフィー
「人格の同一性」「「自己意識、道徳的性格の連続性、そして他の人々および神の双方との人格的関係」に関わるものである。」（283）
「体-記憶の連合基準が狭すぎること」（286）
「同じ道徳的性格」（289）
「性格の同一性」（290）

エヴァース
「サイバネティックス的不死」
「ダイソンとティプラー」（331）
「ヘーゲルが「悪しき無限性」と呼んだところのもの」（332）
「宇宙は時間の点で非対称的」（335）
「われわれの現在の同一性とわれわれの復活させられた同一性との間の一貫性」
「個人的記憶」「文化的記憶」「神の記憶」「アウグスティヌス」（336-340）
「個人的、社会的、また規範的記憶は神がわれわれと御自分の創造のことを気遣っている総体的な領域に埋め込まれているが、その記憶の間の複雑な相互依存が永遠の命の基礎なのである」
「最後の審判」「それは神が彼の記憶と想起を通して、われわれの生きてきた命を新しい永遠の同一性に変換する最後的裁きである」、「神の裁きを通して」（340）
「神の最後の審判を「治療効果のある出来事」として考えることができる」（341）

ピーターズ
「死者を甦らせることにおいて神的力が果たす役割」「死ぬものと甦らされるものとの間の連続性と非連続性を見分ける時の個人の同一性の問題」（396）
「内在的な連続性と超越的な新しさ」（398）
「肉と霊は、体も魂も含めて、全人格を支配することを求めて競う性向ないし力である」（401）
「同一性の連続性は神からの賜物である」
「実体理論と形態理論の双方の困難」「何かが持続することを通して、連続性を探してい

ることである」、「おそらくこうした問題は再-創造に転嫁させねばならない」、「復活させられた体は新しい創造に等しい」（426）
「われわれを新しい創造に変換している間に、われわれの同一性の連続性を維持するために必要なものを提供してくださる」（427）